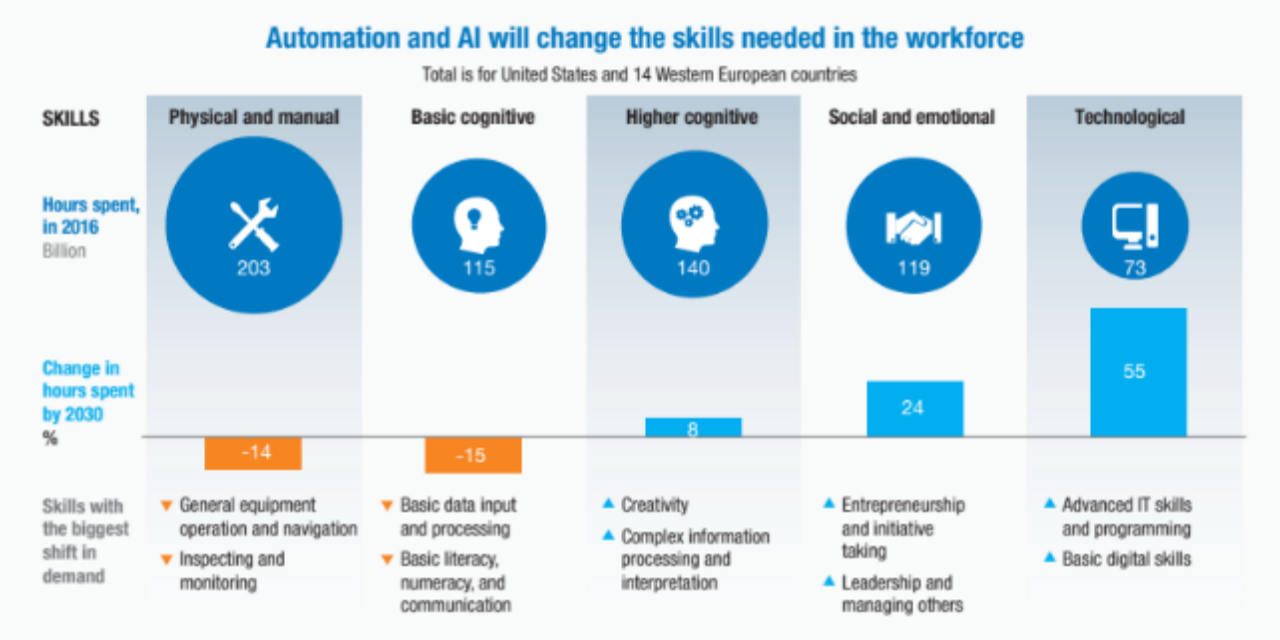
育Me科の目的

現代は「予測不能な時代（VUCA）」や超スマート社会と呼ばれており，この時代に私たちに必要な力は，「非認知能力（社会情動的スキル）」だと言われています。下の図は，人間に必要な力が2016年と2030年でどれだけ変化するか示しています。体力や基礎学力は減少し，社会情動的スキルやデジタル技術力が大きく上昇しています。育Me科は，この時代に求められる力を伸ばすことを目的にした新教科です。



これらの力は，学習指導要領の「学びに向かう人間性等」や学校の教育目標にも含まれています。こうした力を効率的に育成することが育Me科のねらいです。

しかし，社会情動的スキルを鍛える教育はこれまでも学校で実施されてきました。それが道徳，特活，総合的な学習の時間などです。それぞれの授業は，学びの過程に知識をもとにした理解が必要になってきます。育Me科は，これらの教科とは違い，感情や気持ちをもとにした理解を促すことを大切にしています。そのため，ほとんどの育Me科の授業ではロールプレイを用います。基本的な授業の流れは，右の図で示しています。

育Me科は授業で学んだことを日常生活で活かすところまでを意図的に指導します。年間指導計画には，授業と「学びをつなげる場」を位置付けています。また，教室と階段の踊り場には，学びを振り返ることができるポスターを掲示します。そうすることで，児童生徒が学んだことをいつでも思い出すことができたり，教師がタイミングよく指導したりすることができると考えます。各

〈1時間の流れ〉



教科の授業でも育Me科の学びを用いることを教師が意図的に指導することで社会情動的スキルの定着を図ります。



社会情動的スキルの育成について，多くの研究者が幼少期から児童期にかけての環境が大切になると主張しています。具体的には，幼児期におけるアタッチメントの形成と自己肯定感の獲得，児童期における自己決定や協働，成功体験と失敗体験の経験が社会情動的スキルの獲得につながるとしています。

荘川さくら学園では，荘川保育園と共同し12年間で「社会で活躍する力を伸ばす」または「社会で活躍するための土台を築く」ことに取り組みます。これらは少人口の地域にある学校が抱える課題を解決することにもつながると考えています。少人数の環境で身に付く力，経験できることもあれば，多人数の環境で身に付く力，経験できることもあります。しかし，社会情動的スキルの育成に関わっては，多くの仲間がいる環境のほうが育成しやすいはずです。育Me科はこの課題を補うことを目的の一つにしています。そして，もう一つの目的は前述した「予測不能な時代」でも児童生徒が逞しく生きる力を養っていくことです。育Me科はこれら2つの目的をもって生まれました。